

博士(文学)学位請求論文審査報告要旨

| | |
|---------|--|
| 論文提出者氏名 | 木原 圭翔 |
| 論文題目 | スタンリー・カヴェルと古典的ハリウッド映画のモダニズム |
| 審査要旨 | <p>本論文は、アメリカの哲学者スタンリー・カヴェル (Stanley Cavell, 1926-) が著した一連の古典的ハリウッド映画論——とりわけ『眼に映る世界』(<i>The World Viewed</i>, 1971)、『幸福の追求』(<i>Pursuits of Happiness</i>, 1981)、『涙への抵抗』(<i>Contesting Tears</i>, 1996) ——を対象として、カヴェルが古典的ハリウッド映画に見出す「メディウムの自己反省性」という理念の意義を明らかにするものである。</p> <p>全体の構成は「序論」と「結論」を別にして大きく 2 部に分けられ、第 I 部「映画というメディウム」(第 1～3 章) では主にカヴェルにおける概念規定やアプローチの基盤が考察され、第 II 部「モダニズムとしての古典的ハリウッド映画」(第 4～6 章) ではそれらを踏まえたカヴェルの個別的分析の事例が綿密に検討される。</p> <p>本論文の企図を述べた「序論」に続き、第 1 章「自動性とメディウム」では、カヴェルの映画論を語るうえで欠かせない「自動性」と「メディウム」という 2 つの重要概念を考察している。前者については、その機械的特性の実相を再検討することにより、主観性の排除というカメラの根本的な作用の様態を解明している。後者については、モダニズム芸術に対する批評の閉塞性を打破するために打ち出された、「メディウムの創造」と呼ばれる、カヴェルの映画論を支える思想的基盤の意義を検証している。</p> <p>第 2 章「芸術化する映画」では、カヴェルの映画論の重大な転回、すなわち、映画をモダニズム芸術として捉えるという思想的転回の過程とその意義を考察している。そこで明らかにされるのは、『眼に映る世界』と『幸福の追求』以後の映画論との間に存在する、古典的ハリウッド映画に対するカヴェルのアプローチの決定的な変化である。特に、古典的ハリウッド映画をモダニズムの芸術作品として捉えた批評の典型例として、カヴェルの『フィラデルフィア物語』(ジョージ・キューカー、1940) 論が取り上げられ、詳細な検討が加えられている。</p> <p>第 3 章「メディウムの境界」では、映画というメディウムに特有な問題を追究するために、カヴェルが映画の境界をどのように画定しているのか、そしてその境界に基づく映画の定義がどのように彼の映画論の基盤として機能しているのかを探究している。ここでは特に、アニメーションとテレビという映画の 2 つの隣接領域に関するカヴェルの考察が検証されている。</p> <p>第 4 章「思索する女——『ステラ・ダラス』論における「瞬間」の批評」では、『涙への抵抗』所収の『ステラ・ダラス』(キング・ヴィダー、1937) 論を取り上げ、映画における任意の「瞬間」に着目するカヴェルの批評の方法論を検討している。</p> <p>第 5 章「カメラの欲動」では、カヴェルによる映画批評がいかに関心の〈力〉の問題を重視しているかという点を明らかにし、そのことが彼の作品解釈に及ぼしている影響について考察している。とりわけ、カメラの〈力〉をキューカーの作家的特質とみなす姿勢を鮮明に打ち出した『アダム氏とマダム』(1949) 論を取り上げて、その意義を究明している。</p> <p>第 6 章「メディウムの承認」では、カヴェルにとって映画のモダニズム化を象徴する映画作家であったアルフレッド・ヒッチコックに関する論考を検討している。特に焦点となったのは、カヴェルによるモダニズム的映画分析の臨界点を示す『北北西に進路を取れ』(1959) 論であり、彼の分析の手法を可能な限り詳細に追いつつ、そこで執拗なまでに提起される自己言及的観点からの読解の意味を探っている。</p> <p>最後に、カヴェルの映画論が自己反省的傾向を示す理由とその意義について総括した「結論」によって、本論文全体が締め括られている。</p> <p>公開審査会での質疑は 3 時間半近くに及んだが、それを通じて、またその後の合議において、3</p> |

氏名 木原圭翔

名の審査員が一致して高く評価した点は以下の3つである。

1) 少なくとも日本では未だ本格的研究が行われていない哲学者スタンリー・カヴェルの思索について、しかもその映画論について、初めて包括的かつ体系的な論考を構築したこと。

2) 従来、欧米においてカヴェルの映画論が議論される際には、主に『眼に映る世界』を基盤として、「メディウム・スペシフィシティ」や「ポスト・メディウム」をめぐる問題系の一環として論じられがちであったのに対し、それらを踏まえつつも、むしろその後の『幸福の追求』や『涙に抗して』などの著作に着目し、さらにカヴェルの批評的感覚にも留意しつつ、彼がジャンルに対して展開する独特のアプローチを明らかにしたこと。

3) それらの検討を通じて、カヴェルが当初、モダニズムを免れたものとみなしていた古典的ハリウッド映画について、むしろ自己反省的なモダニズムを具現するものと捉えるに至った思索の道程とその意義を明らかにしたこと。

ただし、こうした企図に深く関連すると思われる映画研究の幾つかの領域（とりわけアメリカ映画批評史とフランス・アヴァンギャルド映画理論）や、哲学をはじめとする人文諸科学および文芸批評の分野における論考が必ずしも十分に参照されていない点は、本論文の弱点として指摘しておかなければならない。また、結論部での総括も、哲学者としてのカヴェルの仕事全体との関わりにおいて、確固たる展望を確立するには必ずしも至っていない。

しかしながら、上述したとおり、未だ包括的かつ体系的には考究されていないカヴェルの映画論について、意義深く、示唆に富んだ視座を提起し、今後の研究の発展に大きく寄与する論考であることは疑う余地がなく、その成果をもって、審査員全員一致により、博士学位の授与にふさわしい論文であると判定した。

| | | | | |
|----------|----------------|------------------------|------------|------|
| 公開審査会開催日 | 2015年 7月 28日 | | | |
| 審査委員資格 | 所属機関名称・資格 | 博士学位名称 | 専門分野 | 氏名 |
| 主任審査委員 | 早稲田大学文学学術院・教授 | Ph.D.(フランス国立社会科学高等研究院) | 映画理論 | 武田潔 |
| 審査委員 | 立教大学現代心理学部・教授 | | 映画研究・表象文化論 | 中村秀之 |
| 審査委員 | 早稲田大学文学学術院・准教授 | | 映画史・映画理論 | 藤井仁子 |
| 審査委員 | | | | |
| 審査委員 | | | | |